

日本科学者会議 福井支部ニュース

第5号 2003年10月11日発行

- * * 日本科学者会議福井支部
- * * 〒910-8507 福井市文京3-9-1
- * * 福井大学工学部 小倉久和研究室 気付 Tel&Fax 0776-27-8582
- * * ogura@i.his.fukui-u.ac.jp
- * * 郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部
- * * ホームページ <http://www.jsa.gr.jp/fukui/> (本部のページ <http://www.jsa.gr.jp/> からたどれます)

今号の内容

- 会員の声「中池見湿地保護活動の経緯とその後」(笹木 智恵子)
- 会員の声「まちづくりと人間発達」(本多 昭一)
- 会員の声「市場原理を最善とする新自由主義下での農業の未来を考える」(加藤 武市)
- 寄稿「ラミーカミキリの北上?」(長田 勝)

2003年度後期の会費納入を早急にお願い
します。

過去の未納会費のある方は、分納でも結構
ですので、至急納入をお願いします。

支部例会 **新時代のまちづくりと専門家の役割** を開催

日時 10月21日(火) 18:00 ~ 20:00

会場 福井大学 文京キャンパス

総合研究棟I 1階 総合小1講義室

講師 本多昭一氏(福井大学教育地域科学部)

支部ニュースへの寄稿・投稿を募集しています。意見・見解の表明、経験報告、事例紹介、行事案内、会員への案内、その他、会員の間の交流の場とするため、積極的な寄稿・投稿をお願いします。支部事務局まで、メールでお送り下さい。

会員の声

中池見湿地保護活動の経緯とその後

中池見湿地トラスト（緑と水の会事務局） 笹木 智恵子

まず最初に中池見湿地を巡る経緯について簡単に説明をする。敦賀の民間廃棄物最終処分場増設問題と将来発生すると考えられる水質汚染を危惧して「ナチュラリスト敦賀・緑と水の会」が発足した1990年、この年に敦賀市は第四次敦賀市総合計画を策定、公表した。それを読んだ会員が工業団地造成計画の予定地が中池見であることを発見。ここから保存活動が始まった。市に対して、中池見開発可否判断のための学術調査を実施することを再三申し入れていた。その後、1992年6月27日付、福井新聞が中池見へ大阪ガスがLNG（液化天然ガス）備蓄基地建設を計画と報道、29日には高木孝一敦賀市長と大阪ガスが正式発表し、以後は周知の通りである。環境アセスが終了し、環境影響評価書も知事が26項目の意見を付けたものの承認、建設に向けて準備が始まった。しかし、各方面から多くの研究者、NGO関係者の支援を受けて、中池見での計画阻止と立地見直しを求めてねばり強い運動が展開された。

同時に地権者の協力を得て計画地内に2筆712平方メートルの土地を取得することができ、1996年に「中池見湿地トラスト」を設立、支援者に分筆、登記を行うという共有地トラストの手法でさらに計画見直しを迫った。その間にバブルが崩壊、政府も規制緩和の一環として、電気・ガスの自由化を

決定するなど、計画時と大きく情勢は変化していった。これら情勢のもと、2010年操業開始を目指していた大阪ガス側は1999年9月29日に「着工を10年延期する」と発表。さらに2002年4月9日には「計画を中止する」と正式に撤退が決定した。同年8月25日、敦賀市で開催された第13回全国トンボ市民サミットで歓迎のあいさつに立った河瀬一治敦賀市長は「中池見湿地は残したい」と発言、03年の市長選の公約にも掲げた。

このような経過の末、十数年にわたった中池見湿地の開発問題は消滅したものの、大半を買収・所有している大阪ガスと敦賀市の間で、どのような交渉がされているのか不明で、先行きは不透明である。一方、市議員のなかには早くも次の開発（公園化）を目論む者も現れ、国の自然再生推進法の絡みなど、今後、利権がらみで不要な開発計画をなされる恐れもあり、注視をしていく必要がある。同時に水環境保持のための保全作業を継続的に行っていくことが肝要で、人手と費用の面で引き続き多くの支援が求められる。

現在、NPO法人「ウエットランド中池見」の設立申請をしており、9月2日付で受理された。来春には正式に発足し、新しい時代に向けての活動が始まる予定である。

まちづくりと人間発達

本多昭一（福井大学）

皆さんは「まちづくり」という言葉をどこで耳（あるいは目）にするだろうか？身近な人に尋ねてみると、たいていは行政やその端末的な自治会からの広報のようである。したがって多くの市民は、「まちづくりとは行政の流行のスローガン」と感じているらしい。

現状は残念ながらそんな様子であるが、最初は全く逆であった。明治以来の都市計画が、戦後になっても「上から」住民に押しつけられていたのに対して60～70年代に「下から」突き上げる形で生活環境（改悪反対）改善運動が起こり、その旗印として使われた言葉が「まちづくり」であった。つまり「都市計画」vs「まちづくり」であった。行政や大資本の環境破壊都市計画に反対し、住民からの対案としての計画と実践がこの言葉に込め

られていた。

このまちづくりは困難な作業である。現体制の法と資本・専門家を駆使した上からの計画を阻止し、対案を出し、それを推進するには住民の統一した力とそれを支援する専門家の協働が必要である。教育面では、その仕事ができる専門家を育てる課題がある。また住民も、この闘いを遂行するには労力も知恵も必要である。しかしこの協働の中でこそ、専門家も住民も人間的に成長することが、各地の運動経験から分かってきた。草の根からの民主的変革の動きを地域から起こす場として、いま住民主体の「まちづくり」が重要である。

それだけに、そうでない官製「まちづくり」の煙幕も盛んに張られているようである。

市場原理を最善とする新自由主義下での農業の未来を考える

加藤 武市

規制緩和の具体的な例として、農業では農産物の自由化、食官法の廃止、コメ流通自由化の促進が示されています。

日米安保条約締結後、米国に追随した政策がすすめられています。1963 年頃がコメの史上豊作がみられ、コメ離れ、コメの備蓄等から、1961 年には園芸、畜産の選択的拡大を目的とした農業基本法制定等々、これらは米国がメジャ - や大規模経営を安定させるために、余剰農産物を日本および各国に、農産物の自由化の開放を求めているからです。また、WTO 交渉においても米国は各国に更なる関税引き下げを押し付けています。米国の言いなりになってしまったら日本の農業は崩壊してしまいます。EU では共通農業政策により農業を保護する政策を行なっています。

一方、日本では、規制緩和により国民生活や地域経済に、例えば、公害、自然・環境・景観破壊、乱開発等打撃と混乱をもたらしました。人の命に関わる問題である食品の安全基準についても緩和や安全検査の規制緩和がなされています（小倉正行「食料輸入大国ニッポンの落とし穴」）。輸入食品は安いから輸入賛成等といったおられません。食料自給率 40%、食料の 60% は外国に依存し

ています。先進諸国のなかで日本ほど食料自給率の低い国はありません。食の安全・安心を考えたとき、地元の農産物を消費する「地産地消」の運動を推進すべきです。しかも、日本人には日本人にあった食生活、食文化があります。いまこそ「日本型食生活」を見直して食料の自給率を高める政策を構築する必要があるのでは。

グロ - バル化した国際経済では、日本市場は、もはや日本の企業のための市場ではない。世界の企業のため市場である。」（二宮厚美著「現代資本主義と新自由主義の暴走」）。このように市場競争を進めることが最善であるなら、国家は誰のためにあるのか、私は問いたい。

暉峻淑子さんは「豊かさの条件」を書くに当り「資本主義社会が生み出した競争主義自体が、人間本来の生き方ではありません。現在の市場競争を最善とする新自由主義が何となく時代の趨勢のようになっていますが、私は今度の本で、それに真っ向から挑戦するつもりで、「助け合うこと」こそ人間の社会の歴史本来の姿であると主張したかった。と述べています。

独り言のコラム

「町内会長」から見た行政

筆者は今年、地域の町内会長（自治会長）を担当している。町内会長の仕事は、町内会費の集金の段取りを付けることと、町内に設置されているゴミ収集場にかかわること、これが第一の任務である。

ゴミ収集にかかわる問題は、全国どこでも頭の痛い問題で、解決しそうな課題がたくさんある。問題は何かと言っても「不法」な投棄で、なかでも分別せずに投棄されたゴミは収集してくれないから大変に困る。ゴミ袋に名前を書いたりするなどの対策は、当然ながら役に立たない。そのような不心得者はもともと名前を書かないからだ。4月から市の分別方針が細分化された。その説明会が町内で開かれたとき、会場に入り切れないほどの人が集まったし、出席者から説明に来た市の職員にたくさんの質問があった。この関心の高さはどうだろう、大変感心した。ところで、会場から「今日来なかった人（アパートの住人が多い）に対してはどう周知徹底するのか」という質問があり、職員は「分別案内のチラシを全員に配付している」と答えたが、「どういう方法で配付しているか」との質問には「町内会に下ろしている」という返事で、私もあ然とした。市の言い分も分らないではないが、町内会への加入は任意であって、アパートの住人は加入しない人が多く、この説明会にもきていないのだ。ゴミ収集場の管理や分別責任を町内会にだけ押しつけている姿勢は納得ができない。これはほんの1例だが、自治体が町内会を行政の末端組織のようにみなしている姿勢は一貫している。町内会長には「行政委託員」の辞令が送られて来るのだ！ 外国で生活した経験のある友人の話では、町内会のような自治組織などはないそうだ。戦前の「隣組」は行政の末端組織であったが、町内会は違うはずだ。むしろ、町内会の草の根の多様な活動を、行政は積極的に「支援」すべきなのだ。「責任」を押しつけるのは筋違いである。

町内会費については、もっと問題がある。いろいろな宗教施設や福祉団体から町内会への寄付要請がある。自衛隊協力会からの寄付要請は新聞で取り上げられ、問題となった。各種の共同募金団体の個人募金集金依頼もくるが、募金活動を町内会に依頼して何が募金運動なのか、笑ってしまう。ところで「公民館協力金」は加入戸数割でかなり高額である。町内会会計ではそれ以上分らないが、公民館の運営委員会の報告をみると、納得できない支出項目がたくさんある。なかでも、市などの自治体の事業に使われる金は半端でないだけ、問題が多い。そういう事業の多くは「補助金」であり、企画予算の半額前後しかない。不足分は公民館協力費から支出されている。そういう支出がいくつもあつた。これはいい「税金」ではないか。「補助金」をだしてやるからと事業を押しつけ、不足分を町内会費から巻き上げる。「町内会」は「徴税」組織でもあった！（2003/10/1 OG）

地球の温暖化は、日本列島の昆虫の分布にも影響を与えているようである。チョウ類の分野はアマチュア研究者が多いので、全国各地のチョウ類分布に関する記録が数多く報告されるが、こうした記録からいわゆる南方系のチョウ類の北上傾向が読み取れるのである。

近年、福井県で北上傾向が顕著になっているチョウは、ナガサキアゲハ、ツマグロヒョウモン、イシガケチョウなどで、本来これらのチョウは南西諸島から九州・四国・中国地方に分布していたものである。ツマグロヒョウモンは以前なら嶺南地方の一部でしか見られなかったのであるが、近頃は県内のどこにでも見られる普通種になりつつある。ここで話するラミーカミキリもそのような分布拡大を始めている虫のひとつかも知れない。

ラミーカミキリは薄緑色の体に黒い大きな斑紋という、いかにも南方系の雰囲気漂わせた色鮮やかなカミキリで、昆虫愛好者ならひと目見るなり思わず笑顔がこぼれるであろう。このカミキリムシは、江戸時代に食草のラミーにくっついて日本へ移入され、その当時の分布は長崎県あたりに限られていたようだ。しかし、戦時中に繊維植物としてラミー栽培が奨励され、それに伴って各地に分布を広げたと推定されているが、それでも分布はごく最近まで西日本各地と関東の一部に限られていた。

福井県では1949年7月の鯖江市神明における採集例が唯一のもので（この標本は自然史博物館に保管されている）、西日本の分布域からはとび離れている。日本のラミーカミキリの分布を詳しく検討した穂積俊文先生の論文によると、終戦後の1946年6月当時、名古屋ではすでに相当数のラミーカミキリが生息していたので、鯖江で採集された個体は中京方面からの戦後物資に紛れた“偶産”という判断も可能であろう。

その後、福井県での発見は途絶えていたのであるが、ほぼ50年後の1998年5月末、甲虫研究家の斎藤昌弘さんによって高浜町音海から複数の個体が採集された（お隣の舞鶴では1993年に発見されていた）。このうちの1個体は博物館に寄贈していただいたが、私にとっては「珍品」のイメージが強く自分で採ることはまずないだろうと思い込んでいた。ところが2001年8月、河野村甲楽城でク

マゼミ採集に夢中になっていた私の前に突然ラミーカミキリが現われたのである。この時の感じは、まばたきをしたら次の瞬間そこにいた、と表現すればお分かりいただけるだろうか。思わず目が点になってしまったが、逃げられないよう慎重に網に入れ殺虫管に収めてからようやくホッとした。まだほかにいるかも知れないのであたりを網ですくってみたが、これ以外は見つからなかった。河野村での発見は翌年の分布調査と新たな知見につながった。

翌2002年6月下旬、虫仲間と一緒に河野村から越前町にかけての海岸沿いを調べてみると、食草のカラムシ群落で多数のラミーカミキリを見つけることができた。生息密度はかなり高いように思われた。当初、前年採集された個体は1998年の高浜町での発見後、徐々に河野村まで分布を広げてきた分散個体であり、生息密度は低いだろうと考えていた。ところが場所によってはうじゃうじゃという。どうもこの地域では安定した生息状況が続いているようで、もしかすると高浜町での発見と同時期か、あるいはそれ以前に侵入を果たしていたことをうかがわせるものであった。

福井県のラミーカミキリは1949年の鯖江市の記録以来、1998年の高浜町での発見まで約50年間の空白があることは前に紹介した。この50年の間に既に分布していたものを見落としていただけなのは、という疑念もあるが、福井県各地の甲虫類は佐々治先生を中心にして熱心に調査されており、前述の斎藤さんは高浜町音海をたびたび訪れている。地元高浜町の甲虫相を詳しく調べていたU君の報告にも1998年以前にラミーカミキリはリストアップされていない。もし分布していたなら、これほど美しく目立つ本種を見落とすことはないだろう。やはりラミーカミキリは最近になって分布を拡大し、福井県に侵入したと考えるのが妥当と思われる。

ラミーカミキリの分布拡大の兆候は関東地方においても報告されている。個体数の少なかった従来の分布のボーダーライン付近でも、普通に見られるほど多くなっているようだ。決して「珍品」ではなく、むしろ「普通種」化しているのではないだろうか。私は気候の温暖化がラミーカミキリの増加と分布拡大のきっかけになったと考えているが、今後のこの虫の動向が楽しみである。

福井支部研究会「論理を探る」がスタート（日本の科学者より）

今年 5 月から、福井大学関係の会員（退職者を含む）5 名が集まって、一つの研究会を始めている。まだ研究会の目的や名称もはっきり言えないような試みの段階だが、会の仮称を「論理を探る」としてあるように、＜参加会員の専門分野や興味を持っている問題の中にある「考え方」や「論理」を学びとり、研究活動や日常生活でものごとを論理的に考える力を養い、各自の研究の方法論として、さらには今後の大学運営にも役立てたい＞というのが願いである。

そもそもこの会を考えるきっかけとなったのは一昨年末の福井支部 30 周年記念の集まりである。30 年を振り返ったり現在の状況を語り合っていた時、一会員からかつて研究の方法論などを論じ合った頃を懐かしみ、今またそのような議論を渴望している、との訴えが聞かれた。しかしいま大学はさまざまな困難を抱えながら改革を進めている。地方の小規模大学ではとくに状況は厳しく仕事も山積している。その上会員には有能な教職員が多いただけにとくに多忙である。それならばということで大学の仕事からすでに解放されている退職者(報告者)がお世話を買って出ることになった。

この会は基本的にはオープンであるが、できるだけ突っ込んだ議論ができるように、当面 5 名でスタートした。この人数の範囲でできるだけ広い学問分野からの問題提起や異分野間の立ち入った対話と議論ができるように、つぎの 5 分野；建築計画、教育、歴史、情報、物理を選んだ。

月一回のペースで集まり、今までに「建築のけ方法論」、「教科研究の変遷から見た教育方法と教師教育」、「歴史学と方法論」等のテーマを取り上げた。異分野間の相互理解には時間もかかり骨が折れるが、興味は尽きず参加者の強い意欲も感じられる。議論が一層深まることが期待されている。

(03/8/29、 文責；庄野)